

## <論文>

# 『ハーモニー』が描く近未来 —高度医療社会というユートピア／ディストピア— The Next Future World of “Harmony”: The Utopia/dystopia of an Advanced Medical Society

根村直美\*

Naomi Nemura

### I. はじめに

本稿は、『社会情報学』第12巻2号（2023年12月刊行）に掲載された「『ハーモニー』の描く近未来に関する一考察 —高度医療社会の身体と自己—」<sup>1)</sup>において行った考察を基に執筆されたものである。

上記の社会情報学の論文は、第一義的には、哲学・倫理学の立場から社会情報学の発展や深化に貢献すべく執筆されたものである。それに対して、本稿は、「地域貢献の文脈に重点」(p.4)<sup>2)</sup>を置いて執筆されている。すなわち、本稿は、「一般市民、実務者など幅広い人々」(p.4)<sup>2)</sup>に読んでもらうことにより、哲学・倫理学の立場からより直接的に社会に貢献することを目指すものである。

さて、サイエンス・フィクションは「現実性と虚構性の間」を漂う「疑似的な空間」であるが、その空間は「虚構的な過去」、あるいは、「異化された現在」であるとともに、「まだ知られていないものとしての未来空間」でもある(p.116)<sup>3)</sup>。サイエンス・フィクションは、科学とテクノロジーを媒介として、これからの人間と人間社会を考えることをテーマとしているために、現在のテクノカルチャー的な状況のうちに潜む未来予想図、言い換えれば、我々の社会のうちにすでに潜在しつつある可能性を明らかにすることに貢献しうると考えられるのである。

こうしたサイエンス・フィクションは、Gilles Deleuze と Félix Guattari の議論に基づくとき<sup>4)</sup>、覆い隠されている世界の可能性を提示するという意味での〈芸術〉と位置づけることができる。また、作品が表象する世界を概念化するサイエンス・フィクション研究は、上述のような意味での〈芸術〉を概念化する試みとしての〈哲学〉と捉えることができる<sup>4)</sup>。本稿は、そうしたサイエンス・フィクション研究の一環として、主として、伊藤計劃の小説『ハーモニー』（2008年12月刊行）<sup>5)</sup>の分析を試みるものである。

『ハーモニー』は、「ポストヒューマン状況」、すなわち、「テクノロジー、とりわけ、情報テクノロジーと強く、また、多面的に結びついており、有機体と有機体が組み込まれている情報的な循環の間が分ちがたい状態」(p.35)<sup>6)</sup>にある近未来社会とその行方を描いた小説として世界的に高く評価されてきた。『ハーモニー』は、2009年に第30回日本SF大賞を受賞したにとどまらず、2010年にはフィリップ・ディック記念賞特別賞も受賞している。ただし、伊藤は夭折の

---

\* 日本大学経済学部

作家であり、それらの受賞を生きて喜ぶことはなかった<sup>†</sup>。

伊藤は、『ハーモニー』において、世界規模の暴動と戦争、そして、それらに起因する病気の蔓延に対する〈反動〉として生み出された高度医療社会を想定している。『ハーモニー』は、混乱の後に現れた高度な医療システムに個人情報を提供することで、健康や安全が保障される社会を描く。伊藤の『ハーモニー』は、長引くコロナ禍においてあらためて評価を高めたが<sup>7)</sup>、ポストコロナの現在、『ハーモニー』が描く混乱の後に現れた高度医療社会の姿は、より一層リアリティを増して我々に迫っていると言えよう。「ポストヒューマン状況」、あるいは、ポストヒューマンを描くサイエンス・フィクションは数多くあるが、本稿が『ハーモニー』を取り上げるのは、それが我々の喫緊の課題を先鋭化して描き出していると考えられるからである。世界規模の混乱はまさに我々が経験したものである。そして、そうした混乱の後に現れるかもしれない社会についてもまた、潜在しつつある我々の世界の可能性と考えざるを得ないのである。

これまで『ハーモニー』は、ディストピア小説、正確には、ユートピアになると思っていたら、あまりにもひどい世界になってしまったケース<sup>8)</sup>の系譜の中で読まれ論じられてきた。本稿の試みは、『ハーモニー』が描く「ユートピア=ディストピア」(p. 43)<sup>9)</sup>的な状況を紐解くことを通じて、潜在化しつつある我々の世界の可能性、すなわち、到来しうる近未来の見取り図の1つに光を当てることになるであろう。

なお、これ以降、本稿においては、『ハーモニー』からの引用は、早川書房の2014年の文庫版を用い、文献番号は付さず頁数のみを括弧内に示すこととする。ただし、全編にわたって使われている語の場合には、初出の頁数のみを記載することとする。また、伊藤の『虐殺器官』<sup>10)</sup>についても、早川書房の2014年の文庫版を用い、初出の頁数のみを記載することとする。伊藤と円城塔の『屍者の帝国』<sup>11)</sup>については、河出書房の2014年の文庫版を用い、同じく初出の頁数のみを記載することとする。

## II. 『ハーモニー』の描く高度医療社会

### 1. ストーリー

アメリカで発生した暴動をきっかけに世界を混乱のるつぼに叩き込んだ「〈大災禍〉」(p.21)後、「医療合意共同体」(p.39)、すなわち、「生府」(p.14)が統治する高度医療社会が成立した。人々は、「構成員の健康の保全を統治機構にとって最大の責務」(p.58)と見なす「生命主義」(p.40)の名の下に、「生府」により管理されることになった。人々は、WatchMe(体内監視システム)を体に埋め込み、あらゆるリスクから遠ざけられることになったのである。

主人公・霧慧トアンは「生府」の番人である「世界保健機構(WHO)」(p.40)の螺旋監察官であった。紛争地域の停戦監視などが仕事だ。だが、トアンは「生命主義」への違和感をぬぐうことができず、WatchMeの裏をかいて、禁止された酒やタバコを嗜んでいた。トアンには少女の時、御冷ミアハという友人がいた。成績優秀でありながら、「生府」の管理を憎悪する少女であ

<sup>†</sup> 伊藤計劃は癌のため2009年3月20日に享年34歳でこの世を去った。闘病しながらの執筆活動の様子は『虐殺器官』の「解説」<sup>16)</sup>に詳しい。

った。トアンと零下堂キアンはミアハの導くままに自死を試みた。そして、ミアハだけが死に、トアンとキアンは取り残された。

それから13年。トアンは螺旋監察官となり、キアンは普通の市民として生きてきた。謹慎処分  
で日本に帰国することになったトアンは、キアンと再会し、食事をした。その目の前でキアンは  
自らの首へとナイフを突き立てた。この日、世界で同時多発自殺事件が発生したのである。どう  
して、キアン、あるいは、人々は死を選んだのか。キアンの死の真相を探るうちに、トアンは、  
その背後にミアハの影を感じた。

その同時多発自殺事件の後、ネットワーク24という報道機関に送られた「『宣言』」(p.187)、  
すなわち、誰かの命を奪うことを命じ、それができない者は自身の命が奪われることを宣言する  
何者かのメッセージが放送され、世界は混乱に陥った。

その混乱の中、トアンは、ミアハを追ってバグダッドからチェチェンへと向かい、そこでミア  
ハと対峙することになった。そして、人類を「生命主義」に基づく健康社会と完全に調和させる  
「ハーモニー・プログラム」(p.260)を、「〈次世代ヒト行動特性記述ワーキンググループ〉」  
(p.196)の老人たちに実行させるために、ミアハが世界を混乱に陥れようとしたことが明らかにな  
るのだった

## 2. 『ハーモニー』が描く身体の諸相

伊藤は、『ハーモニー』に先んじて執筆した『虐殺器官』においては、言語の違いによらない  
普遍的な「深層文法」(p.216)を描いている。その「深層の文法」は、虐殺を引き起こすもので  
あり、『虐殺器官』では、言語や言葉を通じて人間の行動が支配される様に焦点が当てられてい  
る。それに対し、『ハーモニー』では、身体を通じた統治が焦点化されている。本節ではまず、  
『ハーモニー』に描かれた身体の諸相をめぐって考察を進める。

### (1) 公共物としての身体

『ハーモニー』の主人公が生きるのは、健康の保全を統治機構の最大の責務と見なす「生命主  
義」に基づく社会である。それは、「成人に対する十分にネットワークされた恒常的健康監視シ  
ステムへの組みこみ」「安価な薬剤および医療処置の『大量医療消費』システム」「将来予想さ  
れる生活習慣病を未然に防ぐ栄養摂取及び生活パターンに関する助言の提供」(p.58)を基本の  
ライフスタイルとする社会である。『ハーモニー』が描く社会は、恒常的健康監視システムへの  
接続によって、「『標準化された』人体」(p.324)を維持し続けようとする高度医療社会である  
が、それは、「生まれてから百数歳ぐらいで死ぬまで、何の病気にもならず、イヤなものは一  
切見ることなく過ごしていける」(p.194)社会である。

『ハーモニー』が描く社会では、「生府」の統治のもとに生きる人間、すなわち、「生府」の  
「合意員」(p.88)は、自らの身体を「公共的身体」(p.23)と位置づける。「公共的身体」とは、  
自分ひとりのものではなく、社会にとっての公共財であるような身体のことである。「生府」社  
会では、体内にインストールされたWatchMeが身体で起こっていることを監視し、メディケア(個

人用医療薬精製システム)が各種の病気に対抗するのに必要な物質を造りだすのであるが、それと同時に、人々の行動をも規制する。WatchMeは、公共の場で興奮するなどの「精神的逸脱」(p.143)への警告も行うのである。

そして、その社会では、「不摂生」(p.82)は許されない。人々は、身体への規制を「規範としてごく自然に受け入れている」(p.143)。自らの身体を「公共的身体」と捉える感覚は、言い換えれば、「リソース意識」(p.23)である。それは、自身の身体を、常に社会にとって欠くべからざる財産と捉える意識にほかならない。身体への規制は、その「リソース意識」に支えられている。「不摂生」は「公共的身体」への攻撃であり「リソース意識」を欠いた恥ずべき行為とする意識が人々のうちに深くしみ込み、「公共的身体」を産出していく。人々を律するものは人々の中に根を張っている。人々は「目に見えずどこにも存在しない規範に従う」(p.258)。皆が自分で身体を律することで、公共化された身体が生み出されていくのである。

『ハーモニー』が描くのは、医療システムに接続されそのシステムに服従することによって、同じような標準体型で人々が生きる社会であり、「医学的に均質化された」(p.93)社会である。その社会の「均質化された」身体は、「完璧な人間」(p.171)に向かっている身体である。後にも述べるように、その身体は、個人が「生命主義」に基づく健康社会と完全に一致し、「一個の全体」(p.362)となることによって完成されることになるのである。

## (2) <プライベートな身体>

ところで、『ハーモニー』では、「公共的身体」ではない<プライベートな身体>も描かれている。それは、「社会のものでも規範のものでもない、自分だけの身体」(p.305)である。

WatchMeが組み込まれる前のトアの身体は<プライベートな身体>であったと見ることができる。それは、身体を公共化するシステムにつながれていないことで可能となっている身体であったが、同時に、ミアハとキアンとの関わりを通じて、個別具体的な状況において立ち現れる身体であった。その身体は、ミアハとキアンとのごく個人的関係を通じて顕在化されるものであり、「真綿で首を絞める」(p.18)ような優しさに満ちた「生命主義」社会の「『空気』」(p.14)への憎悪を通じて構築されるものであった。

そうしたごく個人的関係性において、その3人の少女は、大人になる前に自死を試みる。その試みは失敗に終わるが、身体を公共化するネットワークへの接続を拒否するためには、「権力の限界」(p.291)、すなわち、死を選ばなくてはならないことが示される。また、その試みの失敗とともに、3人の時間は失われることになる。身体を公共化するネットワーク社会においては、<プライベートな身体>を維持し続けるための3人の関係性がもはや望めないことも示されるのである。

さて、大人になりWatchMeをインストールしたトアは、「世界保健機構(WHO)」の上級螺旋監察官となる。そして、それぞれの土地の「生府」が住民に「『健康で人間的な』生活を保障しているかどうか」(p.57)を査察するためにサハラに赴任することになる。トアは「生命主義」の尖兵たる立場にあるが、偽の体内情報をサーバに送信するDummyMeを身体にインストー

ルして監視システムを欺き、酒やタバコなどの「自傷性物質」(p.74)を愉しんでいた。

WatchMeを欺き「自傷性物質」を愉しむトアンにとって、サハラのと地とその地の状況は、監視システムからの「『逃げ場所』」(p.57)であった。その地には、「生命主義」を「帝国主義」(p.40)と位置づけるケル・タマシエクの民がおり、トアンは、そのケル・タマシエクから酒やタバコを手に入れる。ケル・タマシエクの民はWatchMeをインストールしているが、その「医療サーバはどこの生府のネットともリンクしていない」(p.53)。身体を公共化するネットワークに接続されていない民との関わりにおいて<プライベートな身体>が意識され経験されていたがゆえに、そこはトアンにとって「逃げ場所」であったと見ることができるであろう。

そして、そうした<プライベートな身体>がトアンにおいて最も強く意識され経験されたのは、ミアハの影を追いかける行程においてであり、ミアハとの再会、そして、対決においてであった。キアンを含む同時多発自殺事件、それに続く「宣言」後の混乱の中、ミアハを追いチェチェンへと向かうトアンは、この事件が自身にとってごく個人的な事件であることを確認していく。ミアハを追い続けるトアンに対して、いつも嫌味を言い合っていた上司が「もしかしたら、世界はあなたの肩にかかっているのかもしれない。がんばって」(p.306)という激励の言葉を投げかけた。しかしその時、トアンは「これはそもそもの始まりから個人的な事件だったし、その展開もどンドン個人的な狭路にはまっていった」(p.306)と考えるのである。トアンは、世界中で暴動や集団自殺が続いているその時にあっても、世界のことを気にかけてはいなかった。トアンにとっては、キアン、そして、父親である霧慧ファザを殺したかもしれないミアハに会い、何らかの「結末を得ること」(p.306)が行動の根拠であり、実感であった。

ごく個人的な事件であることを確認していくトアンにおいては、「リソース意識」が入り込む余地がなくなり、トアンの身体は個別具体的な状況で立ち現れる<プライベートな身体>へと向かっていく。

ごく個人的な事情の中でミアハを追うトアンは、チェチェンで螺旋監察官ウーヴェ・ヴォールの協力を得ることになるのだが、そのウーヴェは、WatchMeを騙して酒やタバコを嗜む。そして、「この優しさと健康でぎゅう詰めの社会から手前勝手に逃げ出たくて人生をふらふらあっちへこっちへ彷徨った結果(中略)国際社会の責任を一身に背負うこんな職場」(p.313)に来てしまったと語る人物であった。そのウーヴェと関わり、共にWatchMeを欺くことで、トアンは、<プライベートな身体>を意識し経験しはじめていくのである。

そして、トアンはついに、山地のバンカーにおいてミアハと再会する。そこは「医療サーバとはオフライン」(p.323)の地であった。トアンは、そこで、ミアハがステップを踏む姿を見る。『ハーモニー』の描く世界において、はじめて描かれるダンスであり、「タタタッ」「タタン」(p.337)などの擬音によって描かれるステップは、ミアハがやろうとしたことをトアンに語る間続く。このステップの音があることにより、ミアハがやろうとしたことが語られるこの場面は、トアンとミアハのごく個人的な関係性において立ち現れる<プライベートな身体>を感じさせるものとなっている。すなわち、その身体は、医療サーバからは完全にオフラインとなった状態においてはじめて可能となるものであり、2人のごく個人的な関係を通じて個別具体的な状況に

において立ち現れる身体にほかならなかった。

### (3) <生に対する権力>と身体

先に見たように、『ハーモニー』が描く社会では、生命主義に基づき「生府」が「合意員」に健康を保障しようとしてその力をふるい、「合意員」は従順な身体を産出していく。『ハーモニー』で描かれた「生府」の統治は、<より良い生>を実現しようとする権力であり、Michel Foucaultの言う「生に対する権力」、あるいは、「生-権力」<sup>12)</sup>として理解できるものである。伊藤は、ミアハに、「権力が掌握しているのは、いまや生きることそのもの」(p.291)と語らせている。さらに、「死っていうのはその権力の限界で、そんな権力から逃れることができる瞬間。死は存在のもっとも秘密の点。もっともプライベートな点」(p.291)というセリフを言わせているのであるが、そのセリフが、「生-権力」論において、Foucaultが「死は権力の限界であり、権力の手には捉えられぬ時点である。死は人間存在の最も秘密な点、最も『私的な』点である」(p.182)<sup>12)</sup>と論じたのを受けていることは明らかであろう。

その<生に対する権力>から逃れた<プライベートな身体>は、トアンにとって、ミアハとキアンとの関わりの中で意識されるものであった。伊藤は、インタビューにおいて、トアンとミアハ、そして、キアンの関係を「『社会』」と呼んでいる(p.372)<sup>13)</sup>。

『ハーモニー』においては、<プライベートな身体>状況にあることは「自らの身体が、そのまま自らの身体である世界」(p.305)と表現され、その身体については、「わたしのもの」(p.33)と言い表わされる。その一方、トアンは、その少女時代の社会におけるミアハと自分の関係を「同志」(p.99)と表現している。のみならず、自身はミヤハの「ドッペルゲンガーだった」(p.95)とも言う。

トアンにとって、ミアハは、自己ではないが、相互作用を通じて自己を形づくるような存在であったが、その身体は、実は<社会的な存在>であることに拠って立つものであった。ただし、ここでの「社会」は、あくまで、キアンと2人であることが「ミアハの欠落を実感させる」(p.87)ような社会であり、個別具体的な個人が「此処に在る」(p.346)ような社会と考えられる。その社会は、「一個の全体」ではないのである。

ところで、先にも述べたように、<プライベートな身体>は、「公共的身体」を形づくるネットワークから<切り離されること>、したがって、そのネットワークにつながれて同じような体型をもち、互いのことを気遣い合い、「ハーモニーを奏でる」(p.21)ような人々から<切り離されること>、言い換えれば、“切断”<sup>§</sup>によってはじめて可能になる身体である。

前述のように、『ハーモニー』では、トアンは、ミアハに誘われ、キアンとともに、健康を監視し維持する医療システムと「『公共物としての身体』」(p.45)という意識からなる「生府」の統治のうちに組み込まれることを拒んで自死を試みる。ミアハ、そして、トアンにとっては、死は「生府」の「生-権力」から逃れる瞬間であり、プライベートな点である。言い換えれば、「リ

‡ 引用の日本語訳は渡辺守章の邦訳にしたがった。

§ ここでの“切断”は、思弁的な (speculative) ポストヒューマニズムの論者David Rodenが“ethics of becoming posthuman”について論じた際に用いた“disconnection”の概念を参考にしている<sup>17)</sup>。

ソース意識」に基づき「ハーモニー」が奏でられる社会は、健康を監視するネットワークとそのネットワークに服従する人々からの“切断”がない社会である。そこでは「わたしのもの」である身体を維持するための方略をもちえず、「わたし」そのものが維持しえない社会と捉えられていたがゆえに、彼女らは自死を選んだと見ることができるのである。

また、『ハーモニー』では、そのような自死がなくなった世界は、人間が「完璧」となり、その結果、個人が社会と完全に一致し「社会のもの」(p.305)となった世界として描かれる。その世界は、人間の「意識が消滅」(p.262)した世界であり、後にも触れるように、意識をもつ人間にとってはある意味での「死」と引き換えに実現される世界である(p.266)。

『ハーモニー』の後半では、意識、とりわけ、「わたし」という意識の問題が重要なテーマとなっていく。「わたし」という意識をもつ存在においては、“切断”を生むのは、その意識が紡ぎ出す「自由意志」(p.256)だからである。かくして、『虐殺器官』以来伊藤の重大な関心事であり続けた「わたし」という意識の問題が再び前景化してくることになるのである。

### 3. 『ハーモニー』が描く人間の意識

本節では、『ハーモニー』の後半において前景化してくる、意識、とりわけ、「わたし」という意識の問題をめぐって考察を進めていく。

#### (1) 人間の意志

『ハーモニー』では、トアンがミアハを追う行程において、“切断”を生む人間の意志について語られていく。

その口火を切るのが、父親ヌァザの友人でありかつては共同研究者でもあった冴紀ケイタのもとを訪れた際に交わされた会話である。冴紀によれば、人間は、「多種多様な『欲求』のモジュールが、競って選択されようと調整を行うことで最終的に下す判断を、『意志』と呼んでいる」(p.169)。つまり、「人間の意志」というのは、「タマシイ」といった「常識的に思いがちなひとつの統合された存在、これだと決断を下すなにかひとつの塊」などではなく、「侃々諤々の論争を繰り返している全体」という考えが示されるのである(p.170)。冴紀はさらに、「バラバラな断片の集まり」であることを「忘却」して「わたし」という「あたかもひとつの個体であるかのように言い張っている」のが人間だとも言う(p.170)。

そして、トアンの父親ヌァザは、それぞれが自分のもともめるものを主張する欲求に対して与えられる報酬系の諸要素をいじることによって人間の意志を制御することが可能と考え、そのための医療分子の研究を行っていたことが明らかにされる。すなわち、「ある欲求に対して与えられる脳内の報酬が低くなれば」、その欲求のエージェントが「『脳内会議』でイニシアティブをとることが難しくなり」、「人間の決断も自ずと変わってくる」というわけである(p.171)。「人間の意志」の制御とは、「人間のばらばらな欠片でできた魂をかき集めて、パズルを作るようにくっつける」ことによって「完璧な人間」を作ろうという試みにほかならないのである(p.171)。

## (2) 意識の消滅

さて、トアンは、冴紀との面会后、「人間の意志」を制御する医療分子技術を研究するヌアザに会うためにバグダッドに向かう。そこで、「人間の意志」の制御がどのような結果をもたらすのかが語られることになる。

ヌアザは、調和のとれた意志を人間の脳に設定することを目的とする技術とシステム「ハーモニー・プログラム」の重大な副作用を明らかにした。それは、「意識の消滅」(p.262)であった。「意識とはまさに、脳の無意識下に存在する多数のエージェントの利害を調整するためにあるのであって、いわば意識されざる葛藤の結果が我々の意識であり、行動であるのだ」(p.264)。そして、「調和のとれた意志とは、すべてが当然であるような行動の状態であり、行為の決断に際して要請される意志そのものが存在しない状態」(p.264)である。それゆえ、意識は不要になり消滅してしまったというのである。この結果を受け、人間の意志を制御する医療分子群のネットワークは、人間の脳に実装するものの、発現はしないでおくという判断が下されたことが明らかにされる。

それと同時に、意志が制御されることによってもたらされる「意識の消滅」は「わたし」の消滅でもあり、それは、自分が自分であるという意識をもつ存在にとっては「死に等しい状況」(p.266)という見方が示される。ヌアザをはじめとする「次世代ヒト行動特性記述ワーキンググループ」の主流は、「意識の停止」を「死と同義」と捉え、意志の制御を行うことを控える判断をしていたのである(p.344)。

そして、「意識の消滅」を「死と同義」と捉えることと表裏一体であるが、多くの人間は「わたしがわたしであるという脳の機能を失いたくはない」(p.268)とと思っているであろうことが語られる。また、「『わたしはわたしである』という鏡写しの意識こそが人間の尊厳だ」(p.345)とする考えも示されるのである。

一方、ミアハとその考えに与する<次世代ヒト行動特性記述ワーキンググループ>のメンバーは、その場その場での「寄せ集め」(p.343)であるという認識から、意識は必要ないという判断に至る。『ハーモニー』では、「すべての生き物は膨大なその場しのぎの集合体」であり、それゆえ、倫理や神聖さといったものは、「すべて状況への適応として脳が獲得したに過ぎない継ぎ接ぎの一部」と捉えられている(p.325)。その考えによれば、「わたしがわたしであるという思い込み」(p.326)は、ある環境で生きるために必要であったがため、つまり、「生存に寄与したから存在しているだけ」(p.325)である。ミアハとその考えに与するメンバーは、「生府」が高度医療社会を作りあげた段階においては、意識という機能を必要とする環境はすでに過ぎ去っているであり、「人間は、進んで自らの組み上げたシステムに従って、対立や逡巡、苦悩を生む厄介な機能としての意識を除去してしまうべきなのではないか」(p.327)と考えたのである。

## Ⅲ. 『ハーモニー』から『屍者の帝国』へ

先に述べたように、『ハーモニー』のメインテーマ、少なくとも、その1つは、ネットワーク化された社会の身体のあり方がどのようなものとなるのかを描き出すことであったと言ってもよ

い。伊藤は、『ハーモニー』を通じて、生命や健康の保障という名のもと身体がネットワーク化されていく社会を想定する。そして、その社会では、病気をせず長く生きる身体を実現するためには、人類は「一個の全体」としての存在になる必要があり、「わたし」という意識を消滅させることがその存在になることであるというビジョンが示される。『ハーモニー』においては、「公共的身体」が実現し、「医療産業社会との完全なハーモニーをみた人類」(p.362)の状態は、人類が「完全な何か」(p.363)に触れている状態とも言われる。伊藤は、初期のサイバーカルチャー作家たちとは反対に、ネットワーク社会の究極の姿を、「身体からの逃避」<sup>14)</sup>としてではなく、むしろ<精神からの逃避>として描き出したと言えよう。

伊藤は、インタビューにおいて、その状態を「ある種のハッピーエンド」(p.373)<sup>13)</sup>と述べたが、Mark O'Connellが取材したような「トランスヒューマニズム」の立場に立てば、確かにそう見ることにも可能であろう。

O'Connellによれば、「トランスヒューマニズム」とは「われわれは技術を用いて人類の未来の進化を制御することができるしそうすべきだという確信に依拠する運動」(p.2)<sup>15)\*\*</sup>である。一方、『ハーモニー』の描く世界では、身体が恒常的健康監視システムによって管理され、生まれてから「百数歳ぐらいで死ぬまで、何の病気にもならず」過ごすことができる。O'Connellが取り上げるような、テクノロジーを通じた心身の増強を志向し徹底的な生命延長をよしと考えるトランスヒューマニストたちにとっては、そうした高度医療システムが実現した社会は理想に近づいた社会なのかもしれない。

また、『ハーモニー』においては、そうした社会は「わたし」という意識の消失によって実現されているが、O'Connellによれば、Tim Cannonは、徹底的な自己改造を追求する中で、「自己の概念をすっかり消し去る」<sup>††</sup>ことを考えるに至っている(p.141)<sup>15)</sup>。『ハーモニー』の世界はそうしたトランスヒューマニストの考えと呼応していると言えるであろう。

しかしながら、伊藤は、『ハーモニー』の結末について、「はたして本当にそれでよかったのか」という思いがあり、その意味ではハッピーエンドとは言えないと述べている(p.373-374)<sup>13)</sup>。つまり、伊藤は、決して上述のような「トランスヒューマニズム」の立場に身を置いているわけではない。伊藤は、インタビューにおいて、「その先の言葉」を探したが見つけることができなかった、言い換えれば、「その他に言葉が見つからなかった」と述べているのである(p.373)<sup>13)</sup>。

伊藤は、「わたし」という意識の消失を語って『ハーモニー』を終えざるを得なかったが、『ハーモニー』においては、意識をもつ人間が「わたしはわたしである」ことに対して抱くこだわり、作品内の言葉で言えば、「尊厳」の感覚が、身体とともに『ハーモニー』のもう1つのテーマであることは確かである。一旦「わたしはわたしである」という意識をもった人間にとってその意識の消失は「死」に等しい。そして、そうした意識の消失は個別具体的な状況にある<プライベートな身体>の消失でもある。

意識と<プライベートな身体>の消失を描いて『ハーモニー』を終えた伊藤であるが、プロロ

\*\* 引用の日本語訳は松浦俊輔の邦訳にしたがった。

†† 引用の日本語訳は松浦俊輔の邦訳にしたがった。

一グのみを書き残した『屍者の帝国』は「霊素」(p.11)や「魂」(p.13)を語ることを1つのテーマとしており、伊藤が「その先の言葉」を「わたし」という意識についてあらためて書くことで模索しようとしていたことがうかがえる。言い換えれば、伊藤は、「つぎはぎの一部」であり「ひとつのまとまった存在」などではないことを認識しつつもなお、「わたし」という意識の立ち現れをその「わたし」が<書き記す>ことが、個別具体的な主体が解消されるのではないようなネットワーク社会のあり方を見出すための第一歩となりうるかもしれない、と考えたのではないだろうか。

もっとも、伊藤は『屍者の帝国』を完成させることができなかった。伊藤の残したプロローグを書き継いで『屍者の帝国』を完成させたのは円城塔である。

円城は、「わたしは誰だ」(p.486)という問いに対して、主人公ワトソンに、その「わたし」は「ノートに書き記された文字列と何ら変わることはない存在」(p.487)であり、「その中にこのわたしは存在しないが、それは確固としたわたしなるものが元々存在していないからだ」(p.487)と語らせている。ここでは、確かに、確固とした「わたし」の存在は否定されている。

しかしながら、その一方で、円城は、クリーチャー(「疑似霊素」[p.13]をインストールされた「屍者」)であり、ワトソンの記録係であったフライデーに、「わたし」について次のように語らせている。「ぼくは意識を持っているのか。持っている、とぼくは答えるだろう。こうして物語を持つことの可能な意識をぼくはここにたしかに保持している」(p.514)と。

たとえ、文字列の<寄せ集め>であり確固とした存在ではないとしても、その「わたし」について<書き記す>ことが、『ハーモニー』のような結末ではない「その先の言葉」の模索、言い換えれば、個別具体的な主体が柔軟にその存在を維持しているようなネットワーク社会の探究の第一歩となりうるのではないか。少なくとも、伊藤の試みを引き継いだ円城は、そのように考えたと言ってよいのではないだろうか。

#### IV. 結び

『ハーモニー』が描くのは、人々が、健康を維持する医療システムと接続され、そのシステムに服従することによって、「公共的身体」を形成していく社会であった。『ハーモニー』では、人間が「完璧」になったとされる世界のビジョンも示される。それは、もはや「わたし」は存在しておらず、身体は「公共的身体」として完成され、「一個の全体」となることによって実現される世界であった。

その一方で、『ハーモニー』は、逆説的に、意識をもった人間が「わたしはわたしである」ことに対して抱くこだわりを浮き彫りにしている。人類を「生命主義」に基づく健康社会と完全に調和させる「ハーモニー・プログラム」を前にして、伊藤は、「その先の言葉」を模索せざるを得なかったのである。

最初に述べたように、サイエンス・フィクションが潜在する世界の可能性を顕在化させるものであるとするならば、<寄せ集め>であり確固とした存在ではないことを前提としつつ、「わたしはわたしである」ことを手放すことのない未来、ポストヒューマニズムはその未来を描く言葉

を模索しはじめているのである。

## 文献

1. 根村直美 (2023) 「『ハーモニー』の描く近未来に関する一考察 —高度医療社会の身体と自己—」『社会情報学』(社会情報学会)第12巻2号、pp. 49-65。
2. 木下翔太郎 (2024) 「キャラクターIP を活用したオープンアクセスジャーナル創刊による学術コミュニケーション促進の試み」『地球・宇宙・未来』第1巻1号、pp. 3-4。
3. Herbrechter, Stefan (2013) *Posthumanism: A Critical Analysis*. London: Bloomsbury Academic.
4. Deleuze, Gilles, and Félix Guattari (1991) *Qu'est-ce que la philosophie?* Paris: Éditions de Minuit = (1997) 財津理訳『哲学とは何か』河出書房新社。
5. 伊藤計劃 (2014) 『ハーモニー〔新版〕』(2008)、ハヤカワ文庫、早川書房。
6. Hayles, Katherin(1999) *How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics*. Chicago: University of Chicago
7. 野波健祐 (2022) 「感情がもたらす民主主義と分断」『朝日新聞』2022年1月1日。
8. 藤田直哉 (2015) 「キーワード／SF」『蘇る伊藤計劃』宝島社、pp. 68-71。
9. 円堂都司昭 (2019) 「管理と監視」『ディストピア・フィクション論—悪夢の現実と対峙する想像力—』作品社、pp. 15-62。
10. 伊藤計劃 (2014) 『虐殺器官〔新版〕』(2007)、ハヤカワ文庫、早川書房。
11. 伊藤計劃×円城塔 (2014) 『屍者の帝国』(2012)、河出文庫、河出書房新社。
12. Foucault, Michel (1994) *Histoire de la sexualité, tome 1 : La volonté de savoir* (1976). Paris: Gallimard. First published in 1976 = (1986) 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社。
13. 佐々木敦 (2014) 「伊藤計劃インタビュー」『ハーモニー〔新版〕』(2008)、ハヤカワ文庫、早川書房。
14. Brians, Ella (2011) “The ‘Virtual’ Body and the Strange Persistence of the Flesh: Deleuze, Cyberspace and the Posthuman.” In Laura Guillaume and Joe Hughes (eds.), *Deleuze and the Body*, pp.117-143. Edinburgh: Edinburgh University Press.
15. O'Connell, Mark (2018) *To Be a Machine: Adventures Among Cyborgs Utopians Hackers, and the Futurists Solving the Modest Problem of Death*. London: Granta Books. First published in 2017 = (2018) 松浦俊輔訳『トランスヒューマニズム—人間強化の欲望から不死の夢まで—』作品社。
16. 大森望 (2014) 「解説」『虐殺器官』(2007)、河出文庫、河出書房新社。
17. Roden, David (2015) *Posthuman Life: Philosophy at the Edge of the Human*. Abingdon, UK: Routledge.

